12 月 17 日のメッセージ

聖書：マラキ書　3：　19－24

「父の心を子に、子の心を父に」

先主日の聖書には、空気を読んで長いものに巻かれている預言者がいたことが記されていました(「ミカヤを呼びに行った使いの者は、ミカヤにこう言い含めた。『いいですか。預言者たちは口をそろえて、王に幸運を告げています。どうかあなたも、彼らと同じように語り、幸運を告げてください。』」列王記上 22:13)。

しかし、聖書が描き出す預言者の姿は、同じく先主日の聖書に登場したミカヤに限らず、空気を読まずに社会に警鐘を鳴らす者の方が多いのです(「見よ、その日が来る／炉のように燃える日が。高慢な者、悪を行う者は／すべてわらのようになる。到来するその日は、と万軍の主は言われる。彼らを燃え上がらせ、根も枝も残さない。」マラキ書 3:19)。彼らは期待される答えを出すのではなく、神がこの世界をどのようにご覧になっているのか、またどのように向き合おうとしているかを、歯に衣着せずに語りました。神の先駆けとして神の言葉を伝えました。

新約聖書に搭乗する洗礼者ヨハネもまた、その系譜に連なる一人でしょう。彼はいわゆる「預言者」ではありませんでしたが、神の思いを伝え、神の道を指し示しました(「……神の言葉が荒れ野でザカリアの子ヨハネに降った。そこで、……罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。」ルカによる福音書 3:2-3)。

人はその言葉に感銘を受け、洗礼を受けます。一方で、ヨハネの立場を問う者もありました(「そこで、彼らは言った。『それではいったい、だれなのです。わたしたちを遣わした人々に返事をしなければなりません。あなたは自分を何だと言うのですか。』」ヨハネによる福音書 1:22)。ヨハネを支えているのはただ神の言葉のみです(「ヨハネは、預言者イザヤの言葉を用いて言った。『わたしは荒れ野で叫ぶ声である。「主の道をまっすぐにせよ」と。』」ヨハネによる福音書 1:23)。本来、どのような立場の人であっても、同様に神の言葉によって支えられているはずです。なのに、肩書きがなければ言葉に力が無いと思ってしまうのはいつの世も同じと言えるでしょう。

それは、イエス・キリストを宣べ伝えようとする時にも起こってきます。特に今、「宗教は危険だ」とか、「宗教なんてない方が良い」とか、神のことを、イエスのことを証しすることがどれほど難しいか、私たちは身をもって体験したことでしょう。自分の家族にさえ、その恵みを、その喜びを伝えることは難しいものです。手を替え品を替え、時には相手の立場に迎合してでも、何かを伝えられないものかとあくせくしています。

しかし、預言者たちやヨハネの姿は、自分を曲げてでも何とかしろというよりはむしろ、神に生かされている一人としての矜持を保てと言っているように見えます(「こういうわけですから、人はわたしたちをキリストに仕える者、神の秘められた計画をゆだねられた管理者と考えるべきです。」コリントの信徒への手紙一 4:1)。

「武士は食わねど高楊枝」ではありません。恵みを受けた一人として、一所懸命に生きる姿勢を貫くことが大切です。

もっとも、昨今、話題に上ることの多くなった「宗教二世」の問題は、常に私たちの身に伴います。よかれと思って差し出した手が、「余計なことを」と思わせてしまう場合もあります。

「彼は父の心を子に／子の心を父に向けさせる。」(マラキ書 3:24)

イエスが来られて、全ての問題が解決すると思っていたら、さにあらず。人間の心はすれ違いの繰り返しです。そして、そこから生じる争いは終わる気配もありません。

それでも、私たちは諦めるわけにはいかないのです。いつか必ず神の思いが全ての人に届くようにと願いながら、「良い知らせ」を伝え続けるしかないのです(「どうか、わたしの口の言葉が御旨にかない／心の思いが御前に置かれますように。主よ、わたしの岩、わたしの贖い主よ。」詩編 19:15)。

自分の正義を押しつけるのではありません。共に目を開かれて互いに通じ合い、神の方を向くことができる「その日」が来ると信じて、今日も私たちは生かされていくのです。